

## ここが知りたい！ What's 大学院？

歯周診断・再建学分野 高橋直紀



歯周診断・再建学分野の高橋です。大学院を卒業してかなりの年月が経ってしまいましたが、原稿依頼を頂きました。知っているようで知らない大学院の世界をQ&A形式で書こう

と思います。大学院や医局によっては若干異なる部分もあると思われるのであしからず。大学院進学を考えている方の参考になれば幸いです。

### Q1：大学院ってそもそも何ですか？

大学院（だいがくいん）とは、大学の学士課程の上に設けられ、学士課程を卒業した人、およびこれと同等以上の学力を有すると認められた者を対象に、学術の理論および応用を教育研究し、文化の進展に寄与することを目的とするものである（学校教育法第99条）〔Wikipediaより〕。すなわち簡単に言うと、学部を卒業した人がもう少し専門的な勉強したいと思って入る組織のことです。

### Q2：博士課程って何ですか？

我々が言う博士課程は博士後期課程のことで、大学院4年間のことになります。必修講義の履修と、学位論文を書いて学位審査に合格すれば、晴れて博士（歯学）になることができます。博士にも、博士（医学）、博士（薬学）など、様々な種類がありますが、英語にするとすべてPh.D. (Doctor of Philosophy) です。ちなみに、歯学部を卒業して歯科医師国家試験に合格すると、D.D.S. (Doctor

of Dental Surgery) の称号が与えられます。先生方の肩書きにある「Ph.D」「D.D.S.」にはそのような意味があるのです。

### Q3：博士号を取得するといいいことがあるのですか？

単なる肩書きです（笑）ただ、本当に大切なのは、その肩書き自体ではなくて、それを得るための過程で培われた様々な「力」です。自分の研究に必要な情報を文献やインターネットから入手し、有用な情報だけを取捨選択する「検索力」であったり、英語論文の読み書きから得られる「語学力」、学会発表で多くの研究者との意見交換を通して培われる「コミュニケーション力」、実験で得られた個々のデータを論理的に考える「考察力」など、社会人として必要な能力ばかりです。いずれは臨床家となる上でも必要不可欠な能力だとは思いませんか？それらを系統立てて効率的に習得することができる場所、それが大学院なのです。

### Q4：大学院生って普段何をしているの？

大学院生の本業である「研究」がメイン活動であることは言うまでもありません。それに加え、必修講義の履修、外来での診療、講義や学生実習のアシスタント、医局のお仕事、連携病院でのアルバイト等々。今さっと思いついただけでもこんなにありますが、無駄な仕事はひとつもありません。いつの日かどこかで役に立つ経験となるはずです。学部生よりも自由度が高い分、自分できちんと計画性を持って、積極的に学習しようとする姿勢が必要になってきます。

#### Q5：研究ができるか不安なのですが？

まったく心配いりません。学部生の頃から基礎系の教室に出入りしていた方を除いて、ほぼ全員が研究の初心者です。DNA、RNAとは何か？ピペットの持ち方は？など、基本的なことから優しい先輩たちが手とり足とり教えてくれるに違いありません。

#### Q6：経済的にどうなのですか？

研修医を終えた後、再び学生に戻るわけですから経済面は皆さん心配されるようです。確かに学費・生活費はかかりますが、授業料免除制度や、無利子の奨学金があります。しかも大学院中に優秀な成績を収めると奨学金が返済免除になる制度もあり、実際に免除になった方も周りにいます。また、TA（ティーチングアシスタント）、RA（リサーチアシスタント）、連携病院でのアルバイトなどにより、普通の生活ができる程度の収入は得られます。もちろん学業が最優先ですので、その辺はバランスよく行うことが大切です。

#### Q7：大学院を卒業した後の進路は？

色々です。大学で上を目指す、基礎研究者になる、海外留学する、開業する、勤務医になる、結婚して永久就職する等々。これらの選択肢を残しておいて、自分の適性を判断するために大学院へ進学するのもよろしいのではないのでしょうか。長い人生の中のたった4年間、決して遠回りではな

いと思います。ちなみに、私は大学院卒業直ぐに渡米し2年間の留学を経て、今現在は歯周診断再建学分野のスタッフとして、研究を中心に臨床と教育に励んでいます。

#### Q8：どこの大学院がおすすめですか？

その分野に興味がある、専門的な知識・技術を習得したい、誘ってくれる先輩がいる、医局の雰囲気良さそうなど、大学院の分野を選ぶ理由は何でもいいと思います。大切なのは「どこに入るか」ってことより「そこで何をするか」です。博士号+αの付加価値を見出すために最大限の努力をする、それが大事です。

ちなみに最後に宣伝になりますが、当分野の大学院では卒業までに「博士（歯学）」と「日本歯周病学会認定医」を取得できるような体制が整っています。研究と臨床のバランスを取りながら大学院生活を送りたい方にはいいかもしれません。もしご興味があれば、まずは周りにいる先生方に直接話を聞いてみて下さい。

#### 参考ホームページ



歯周診断・再建学分野HP



歯周-全身プロジェクトHP

# 『大学院に行こう』

鶴岡市立荘内病院 歯科口腔外科 齋藤大輔

はじめまして。口腔再建外科の齋藤大輔です。私はこの春、無事に新潟大学医歯学総合病院組織再建口腔外科学分野の大学院を卒業し、現在は山形県の鶴岡市立荘内病院歯科口腔外科に出向中です。今回「大学院に行こう」への原稿依頼がありましたので、自分の大学院での生活や学んだことなどを紹介したいと思います。

皆さんは大学院と聞くとどのようなイメージを持っているでしょうか？朝から晩まで研究漬けで、研究室に籠もりっぱなしというイメージでしょうか？研修医時代の自分はそのようなイメージを持っていました。ところが口腔外科系の大学院の1年目はひたすら臨床です。私が大学院1年目の時はローテーターとして外来・病棟・麻酔科を4か月ごとで回り、口腔外科・歯科麻酔科の基礎を学びました。指導医のもと埋伏抜歯や小手術を学ぶのですが、最初からうまくいくわけもなく、ひたすら汗をかく毎日でした。また歯科麻酔科では、優しい先生方からラインの取り方から挿管、術中管理と丁寧に教えてもらいました。もちろんラインがとれず失敗したり、挿管がうまくいかないことも多々あり、汗だくになりながらやっていました。初めて経験することが多すぎて、この1年間はあっという間に過ぎてしまいます。2年目からいよいよ研究がスタートします。当科では基礎研究と臨床研究があります。基礎研究へ進む人は臨床を離れ研究に専念します。臨床研究の場合は臨床を継続しながら対象患者からデータを採取していきます。自分の研究テーマは『顎変形症』に関する臨床研究であったので、臨床を続けながら研究をすることとなりました。前任の齋藤力名誉教授、小林正治教授のもとで顎変形症を学びながら必要なデータを採取しました。3年目になるとデータも徐々に集まってくるので様々な統



計的手法を用いてデータの解析を始めました。もちろん予想通りの結果は出ないので、追加の研究もはじまりました。そんなこんなしているとあっという間に大学院4年目に突入です。この年で研究結果をまとめ英語で論文を書かなければなりません。自分の場合は論文を仕上げるために最後の3ヶ月間は臨床を離れ研究に専念することとなりました。この期間はさすがに夜遅くまで大学に残ったり、時には朝方まで研究や論文作成をしていましたが、教授や指導して頂いた先生方の手もお借りし、何とか論文を仕上げることができました。

大学院を卒業した今振り返ってみると、大学院の4年間は忙しかっただけとても充実していたと思います。学生時代の勉強は与えられた範囲の知識を詰め込むことがメインでしたが、大学院での勉強は自分で考え発展させていかなければなりません。そのためには文献を読み漁ったり（これが一番苦手）、それをもとに多方面から物事を考えたりということが必要です。これは1つのテーマにどっぷり浸かって、時間を費やして初めて身に着くスキルではないでしょうか？自分の場合は臨床研究でしたが、基礎研究の場合も同じだと思います。大学院は研究のスキルを学ぶことはもちろんですが、物の考え方や勉強の仕方を学ぶ場

もあると思います。研究に興味があり研究者になりたい人はもちろん、臨床にも研究にも興味がある人、臨床研修後の進路に迷っている人はぜひ大学院への進学をお勧めします。大学院で学んだこ

とはその後臨床にでてからも必ず役に立つと思います。人間としての幅を広げるためにも大学院への進学も選択肢の一つに入れてみてはいかがでしょうか。



同門会にて顎外科同期と!!

# 大学院もひとつの道

顎顔面口腔外科学分野 大 貫 尚 志

大学院へ行こうというテーマで、原稿依頼がきました。大学院を卒業してかなり経つと思いきや、まだ3年ちょっとしか経っていませんでした。何を書こうかと悩みましたが、私は、歯学部入学までに他大学や会社勤めを経験しており、また最近では編入試験での入学者もいますので、自分のように少し遠回りした人が大学院進学を考えるきっかけになってもらえるように、大学院入学に至った経緯を中心にお話しします。

私は、歯学部入学以前は化学を専攻し、学部、修士課程修了後、会社勤めをしておりました。会社時代も同僚や先輩、後輩に恵まれ非常に良い環境の職場でした。仕事は嫌ではないものの、医療系への興味も捨てきれず、自分の人生一度きりとの思いで歯学部受験を経て、入学しました。歯学部は卒業まで6年という非常に長い時間がかかります。卒業してみるとあっという間なのですが、年だけは取っているにもかかわらず、学生という甘い立場で過ごした6年は、同世代の人間と比べた時に自分の力のなさを思い知らされます。会社の同僚とは今でも時々会いますが、同僚が後輩の指導やさらにグループのリーダーになっている話を聞くと、自分が成長していないことに気付かされます。

歯学部を卒業すると1年間の研修が義務化されています。私は、1年間の研修で前半は顎顔面口腔外科で、後半は長岡赤十字病院で研修を行いました。研修を通して、口腔外科をさらに深く学ぼうという気持ちが強くなり、顎顔面口腔外科学分野に入局する意思を固めました。当初は臨床さえ出来れば良いと思い、大学院は考えておりませんでした。しかし、口腔外科を深く学ぶためにはしばらく大学に残ったほうが良いと考えました。そこで、大学で勉強していくならやはり、大学院まで進み、臨床だけでなく基礎研究の目を養い、総



合的に成長する必要性を感じたわけです。ところが、大学院進学となると生活ができるのかどうか不安になります。ここで進学をあきらめてしまうことが多いと思いますが、最低限の生活ができるようにするためにはどうしたら良いか考えました。研修終了後1年間のレジデントコースがあり、社会人大学院への進学も並行する事が可能であることを知り、顎顔面口腔外科学分野の高木教授に相談し、レジデントとしての受け入れを許可していただきました。レジデントを受け入れてもらえるかどうかは医局の体制によるものでしょうから事前に相談してみましよう。生活は何とかできるようになり、私生活でも大学院3年生時に結婚できました。私の少ない給料でも何とか一緒にいてくれた妻には感謝です。

さて、大学院での生活はどうだったか？1年目は社会人大学院のため、昼間は外来、病棟診療に従事することができました。研究の方は口腔解剖学で研究できるように高木先生から前田先生に頼んで頂き、2年目から本格的に研究が開始され



ました。泉先生に基礎からみっちり鍛えて頂きました。研究のための情報収集を行い、学会発表、論文作成まで一連の仕事を教えて頂きました。海外での発表も貴重な経験となりました。研究で培われた思考は、臨床の場でも大いに生きるものであり、現在の思考の礎となっています。

卒業後は、関連病院に出向し臨床経験をたくさん積むことができました。今後は大学に残り、お世話になった医局に貢献するよう努力するとともに、

自分自身が成長するように精進しなければなりません。まだまだ未熟ですが、今の自分がいるのも大学院での4年間を経験したからこそだと思います。

最後に、この経験の話が、大学院進学を考えるきっかけになればうれしいです。口腔外科に興味がありましたら、いつでもお話に来てください。お待ちしております。

